

## コラム

## ゴン

ゴンとは、ジュビロ磐田のエース中山雅史選手のニックネーム。中山選手がオニガワラゴンゾウというキャラクターのまねがうまかったらしい。権蔵氏は、ビートたけしのテレビ番組「ひょうきん族」に登場したドーナツ髭の人気者だ。

今回は、少々「ゴン gon」にこだわってみたい。gon は医学用語にしばしば登場する。最近、淋疾 gonorrhea の分泌液中の好中球に貪食された淋菌 *Gonococcus* の顕微鏡写真を撮る必要があった。泌尿器科の先生にお願いしたところ、「今は淋病の旬だから、すぐに材料は手にはいるよ」とのこと。事実、翌日には早速、ガラススライドに塗抹された膿がわが病理診断室に届けられた。教授いわく、金回りのよい年末のボーナスから一月くらいの間にこの病気は集中すること。「また、夏まではしばらく少ないかも。」

gono は性や生殖を表すことばで、ギリシャ語の gonos (種) に由来する。性腺は gonad, 性腺刺激ホルモンは gonadotropin, 種類や属を表す genus (複数形は genera) は、ラテン語の generare (生む) に基づく。gender (性), gens (氏族), genius (天才), gene (遺伝子), genesis (起源) などがその派生語だ。探せば、gametogony (有性生殖), ontogeny (個体発生), spermatogonium (精祖細胞) といった gon に関連した医用複製語が結構使われているのに気づく。

膝の痛みは gonalgia と称されるが、この gon は、はて何だろう。どうやらこの gon はギリシャ語由来の単語 gony (膝) 由来で、生殖には無関係らしい。米国国防総省の俗称として有名な pentagon (五角形) の gon は、angled の意味を表す接尾語で、医学の分野でも、goniometer (測角器) や goniometry (測角法) として用いられている。

それでは、glucagon の gon は何だろう？ 1923 年、

Kimball & Murlin は、臍抽出液中の血糖上昇物質に対して、glucose を動員する物質 glucose mobilizer の意味で glucagon と命名した。つまり、gluco と agon (ギリシャ語で競争の意) の合成語である。agonist (働筋) および antagonist (拮抗筋) はよく使われている。苦悶や死戦期を表す agony や agonal も有名である。なお、昆虫の血糖は glucose でなく、trehalose という二糖なのだが、昆虫の脳から分泌される血糖上昇物質は、trehalagon と称されている。

ところで、さきに紹介した *Gonococcus* に見舞われた若き男性は、恥じらいながらも女性との性交渉を否定したらしい。そこで、ベテラン泌尿器科医が質問した。「いったいどこで、いわゆる“なま尺”をやったんだ?」「あの、平塚の——。」そう、最近の淋疾の多く(半数以上)は、女性の「のど」からもらうのだそうだ。エイズ騒ぎのおかげで、直接の性交渉が減り、その代わり、このような症例が増え続けている。女性では、淋菌性尿道炎のみならず、淋菌性咽頭炎も無症状の場合が多いのだ。以前聞いた、耳鼻科で開業している先輩医師の嘆きを思い出す。「最近の性病は変わったもんだ。若い女性は、のどに梅毒をもらうようになったよ。」泌尿器科医、皮膚科医や耳鼻科医の守備範囲は、今や、従来以上に広げざるを得ないのかもしれない。

もう少しだけ医学用語にこだわらせていただく。上に紹介した行為 fellatio は日本語では「吸茎」と称するのだそうだが、この述語は、吸うを意味するラテン語 felare (名詞は fellatus) が起源だそうだ。この“fe-”は、ミルクを吸うあるいは吸わせることを内包するたくさんの言葉を派生している。fetus (胎児), fecund (多産の), feme (女性) のほか、female, feminine, feminism など。ウーム、医学用語もなかなか奥が深い。

(医学のあゆみ 1996, 177: 262 より引用)

## コラム

## ピロリ菌

ピロリ菌は、胃粘膜に感染して胃炎や胃・十二指腸潰瘍の原因と目されている細菌だ。「♪ピロリ、ピロリ、胃がんの原因♪」と歌うのは、人気ロックバンドの爆風スランプ。病理医は毎日、胃カメラで採取される胃粘膜片にピロリ菌がいるかどうかを判断する。同僚の言。「抗生物質でピロリ菌を殺したら、お酒がおいしくなったし、二日酔いしなくなった。」胃の不快感が消えてすっきりすることは確かだ。豪州の病理医ワレン博士が胃粘膜に棲むらせん状細菌＝ピロリ菌を顕微鏡でみつけ、同僚の内科学修研医だったマーシャル医師が孵卵器培養に成功した、と報告したのは 1983

年。ちょうどそのころ、病理医である著者も胃粘膜における免疫反応の研究に没頭し、穴のあくほど顕微鏡を覗いていた。私の結論は、何らかの病原性物質の持続的刺激が「腸上皮化生」という胃粘膜変化に運動する。しかし残念なことに、うじゃうじゃと胃粘膜にたかるピロリ菌にはほとんど気づかなかった。標本の条件は今とほとんど同じ。みていたはずなのにみえなかった！ 今思えば、いささか夢中すぎた。あのとき気づいていれば、といくら悔やんでも後の祭り。ゆっくりと増えるピロリ菌をマーシャル医師がみごと培養した秘訣は、復活祭の 5 連休をまるまる休んだこと。働き過ぎで心の余裕がないと結局損をする。ああ実感。